

カメルーン共和国

【国名】

- 15 世紀に最初に渡来したポルトガル人が、この地方を、近海でとれるエビ（ポルトガル語でカマロンイシュ）で呼び習わしたのが由来。

【国旗】

- 緑は国の南部の森林地帯を、黄は輝く太陽と北部のサバンナを、中央の赤は両者の団結と耕作地帯を象徴する。



カメルーン国旗

- 中央の星は、栄光を象徴する。

【国土】

- 中部アフリカの大西洋側に位置し、西側はギニア湾に面している。面積は 475,400 km²（日本の約 1.26 倍）。首都はヤウンデ。人口は約 2,405 万人。



【カメルーンは「アフリカの縮図」】

- 約 250 の民族グループと言語が存在し（公用語は英語と仏語），アフリカ大陸のほとんどの気候，地勢が揃っていることから「アフリカの縮図」と言われる。
- 南西州には標高 4,090m の中部アフリカ最高峰カメルーン山がそびえる。カメルーンは伝統的で多様な文化や慣習を維持し，国内に多くの伝統的な王国が存在する。中でも，西部州バフサムの北東に位置するフンバン王国の王宮は文化的に高い価値を有している。

【初めて国内の大型木造建築に使われたアフリカ材】

- 木材は、カメルーンの主要輸出産品の一つ。
わが国はカメルーンから家具や和太鼓の枠組みに使われる木材（ブビンガ）を輸入。
- 2018年10月に落慶法要が開催された奈良の国宝・世界文化遺産である興福寺中金堂では、約300年ぶりの再建時に、カメルーン産ケヤキ66本を柱として使用。
- 興福寺に使われたケヤキは約20年前に伐採されたもの。熱帯育ちのケヤキは年輪が不明瞭であり割れが生じにくい。伐採前の高さは50m以上あり、切り倒した際には4km離れた場所でも地響きがしたという。

【カメルーンのスポート＝サッカー「不屈のライオン」】

- カメルーンのスポートといえばサッカー。ワールドカップでの活躍から「不屈のライオン」の愛称で世界中に知られている。
- 日本のサッカーJリーグ「ヴィッセル神戸」で活躍したパトリック・エムボマ選手は元カメルーン代表選手。
- 2010年の南アフリカ・ワールドカップ・アフリカでは、見事に予選を突破し、初戦（6月14日）に日本代表と対戦した（結果は1-0で日本の勝利）。

【大分との市民交流】

- 2002 年のサッカー・ワールド・カップでカメルーンのキャンプ地となった大分県中津江村（当時）とビヤ大統領の出身地であるメヨメサラ市とが友好親善関係協定を締結。中津江村の坂本元村長はビヤ大統領からシュヴァリエ章を受賞。
- 2017 年 8 月，「大分ーカメルーン共和国友好協会」が発足。メンバーはカメルーンと縁のある大分県内の民間企業関係者や，元青年海外協力隊員。同年 11 月には，旧中津江村村長の坂本休氏ら協会関係者約 20 名がカメルーンを訪問した。
- 2018 年 5 月，カメルーンの建国を祝うナショナルデー祝賀会が中津江村で初めて開催された。

【津島市との友好交流】

- 2005年の愛知万博では津島市がカメルーン
のフレンドシップタウンになり，津島市は
消防車を供与。2006年2月に津島市長が津
島市民とカメルーンを訪問。同8月には津
島市より新たに供与された消防車と工事用
車輛（計3台）がドゥアラ港に到着。

【ビヤ大統領の訪日】

- 2006年4月16日から20日，ビヤ大統領夫
妻が公式実務訪問賓客として訪日。
- カメルーン郵政公社は，2006年4月のビヤ
大統領による訪日を記念して，日本とカメ
ルーンの友好を示す記念切手を発行した。

【明治時代に初めてカメルーンを訪問した日本人ツノダイチゾウ氏】

- 1905 年，箱根出身のツノダイチゾウ氏は，オーストリア人研究者（Dr. K. Haberer）に助手として同行し日本人として初めてカメルーンを訪問。魚類学に従事し，カメルーン国内を訪問し，稲作指導や図工の授業等を行い市民と交流したと伝えられる。1907年に腸チフス（熱帯熱マラリアとの説もあり）で死去しカメルーン財務省横の墓地で眠る。
- ツノダ氏に関する文献は少ないが，カメルーンの非営利団体「La Concorde」が同氏の研究と広報を継続。また，ユネスコのプログラムで同国を渡航した花岡松枝氏の著書「失われゆく楽園（1963年，実業之日本社）」内にツノダ氏に関する記載がある。

【日本在住 30 年, カメルーン人漫画家星野ルネ氏】

- タレントで漫画家の星野ルネ氏は、カメルーン人の両親のもとにカメルーンで生まれ、母親が日本人と結婚したことをきっかけに、4 歳で兵庫県に移住。星野氏は、日本とカメルーンの違いや、学生時代の級友の反応などをエッセイ漫画にして話題を集める。数年に 1 回はカメルーンへ帰郷。

(了)